

静岡文化芸術大学 図書館・情報センターだより

新知故温

Shizuoka University of Art and Culture Library News

2017.12 Vol.31

平成29年12月発行

発行所 静岡文化芸術大学 図書館・情報センター
〒430-8533 静岡県浜松市中区中央二丁目1番1号
TEL(053)457-6124 FAX(053)457-6125
<http://www.suac.ac.jp/library/>

Contents

■表紙

「ベートーヴェン・コレクション」

"Die Beethoven-Sammlung" — ①

■図書館散歩

あなたの知らない本の世界 — ②

英語・中国語教育センター長 教授
横田 秀樹

私の小説の読み方 — ③

デザイン学部 デザイン学科 教授
的場 ひろし

■特集

わたしの1冊 — ④

～おすすめの本を紹介します～

■巻末

図書館ニュース — ⑧



「ベートーヴェン・コレクション」

"Die Beethoven-Sammlung"

herausgegeben von der Staatsbibliothek zu Berlin, Preußischer Kulturbesitz

[762.34/B 32]

皆さんは「マイクロフィッシュ」(microfiche)をご存知ですか。これは、シート状のマイクロフィルムのことで、印刷物などを縮写して大量保存するためのものです。資料保存のデジタル化が進み、最近あまり見掛けなくなりましたが、今回は当センターで所蔵している唯一のマイクロフィッシュ資料「ベートーヴェン・コレクション」をご紹介します。

当センターが所蔵する「ベートーヴェン・コレクション」は、ベルリン国立図書館所蔵(旧プロイセン文化財音楽部門)の手書き楽譜資料で、全460フィッシュという大量の資料集成です。このコレクションには、19世紀後半から20世紀初頭にかけてベルリンの「プロイセン文化財音楽部門」が収集したものに加えて、ポーランドのクラクフにあるヤギエロ図書館(ビブリオテカ・ヤギエロンスカ)が所蔵している、ベートーヴェンの署名のある自筆譜や、写譜師によって清書された筆写譜への自筆訂正などのある貴重な資料も含まれています。

ベートーヴェンの自筆による手が加わった資料は、このコレクション460点のうち約100点にのぼります。交響曲第5番(運命)、第9番(合唱付き)をはじめ、さまざまな室内楽やピアノ曲の自筆譜や筆写譜が見られます。

ベートーヴェン自身や当時の写譜師による手書き楽譜を見ることは、ある種の美術品を鑑賞するようなものであり、研究者のみならず学生や音楽ファン等あらゆる人にとって貴重な財産といえるでしょう。

参考文献

・平野昭「ベートーヴェン・コレクションの意義」
(静岡文化芸術大学図書館・情報センターWebサイト「特別資料」)
<http://www.suac.ac.jp/library/material/special.html>



英語・中国語教育センター長 教授

横田 秀樹

Yokota Hideki

本文中に登場した図書

カール・セーガン[著]、木村繁[訳]
『COSMOS』(上)(下)
[440.4/Sa 15/1]
[440.4/Sa 15/2]

立花隆、利根川進[著]
『精神と物質：分子生物学は
どこまで生命の謎を解けるか』
[464.1/Ta 13]

福岡伸一[著]
『生物と無生物のあいだ』
(講談社現代新書)
[081/Ko 19/1891]

ダン・ブラウン[著]、越前敏弥[訳]
『ダ・ヴィンチ・コード』(上)(下)
[933.7/B 77/1]
[933.7/B 77/2]

スティーブン・ピンカー[著]、
幾島幸子、桜内篤子[訳]
『思考する言語：「ことばの意味」
から人間性に迫る』
(上)(中)(下)
[804/P 66/1]
[804/P 66/2]
[804/P 66/3]

マイケル・サンデル[著]、
鬼澤忍[訳]
『これからの「正義」の話をしよう
：いまを生き延びるための哲学』
[311.1/Sa 62]

西内啓[著]
『統計学が最強の学問である』
[350.1/N 86]

Pamela Meyer
"Liespotting：
proven techniques to detect deception"
[336.4/Me 95]

あなたの知らない本の世界

宇宙の端はどうなっているのか？それを越えると何か存在するのか／しないのか？フィボナッチ数列 0, 1, 1, 2, 3, 5, 8, 13, 21... は、なぜさまざまな形(ヒマワリの種の並びや植物の枝葉の生え方など)で自然界に現れるのか？多くの謎が自然界にはあります。当然ですが、ヒトも自然界の一部です。一見、自然科学とは別世界に見える「言語」にも同じことが言えます。それは人間の頭の中で起こっている自然現象の一つです。例えば、世界中の自然言語の文法(もちろん日本語も)の中には、「経済性の原理」が働いていると言われています。多くの文法にその一端が表れていますが(例えば、Wh疑問文)、その原理そのものは、言語に限ったものではありません。その言語現象は、物理学における基礎原理の一つである「フェルマーの原理」や「最小作用の原理」に起因します。言語の未知の部分は自分の中に潜むものなのですが、まるで宇宙の法則が自分という人間の中に流れているような不思議な感覚にとらわれます。

長い前置きでしたが、私にとって、このような興味・関心が本を読む大きな動機付けになっていると思います。なぜこんなことに興味があるのかと考えてみると、現実逃避のため(笑)、不思議なこと、夢のあることを考えるのが好きだったからかもしれません。しかし、高校生までは、ほとんど本を読まない生活を送っていました。それではダメだと思い、大学時代には文学作品を含めさまざまな本を読みました。特に、専門的な数学を使わず、文系の人にも分かりやすい図や例で理系の内容を解説してくれるブルーバックス・シリーズ(http://bookclub.kodansha.co.jp/product_list?code=bluebacks)をじっくり読むことが好きでした。また、当時、私にとってインパクトがあった本は、カール・セーガンの『COSMOS』でした。さまざまな自然界の出来事や現象を科学的に解明しようとする姿勢からは大きな影響を受けました。今となっては解決済みの古典的な問題も含まれますが、まだ新鮮に感じる部分も少なくないと思います。このような文庫や新書は手に取りやすく、自然に読む習慣ができ、現在も続いています。古すぎないところで、立花隆・利根川進『精神と物質：分子生物学はどこまで生命の謎を解けるか』や、福岡伸一『生物と無生物のあいだ』、そして映画にもなったダン・ブラウン『ダ・ヴィンチ・コード』は印象に残るものでした。

また、さまざまな分野でパラダイムシフトを起こした人物のことが気になり、その内容を知りたいと思い関連の本を読みあさることがあります。例えば、有名なところでアインシュタイン、フロイト、ワイトゲンシュタインなどですが、現在の私自身の研究の基盤になる理論の提唱者であるチョムスキーもその一人でした。実は、大学時代はチョムスキーの理論は全く学んだことがなく、大学院の修士課程では興味があったものの専門の先生がいなかったため、自分自身で本を読むことで理論の大半を学びました。チョムスキー自身が書いた本は難解でしたが、関連の解説書などは豊富にあり、一つひとつの仮説や説明をゆっくり考えながら読み進めるととても大きな達成感と喜びがありました。また、仮説によっては、自分でも新たな可能性や証拠を出せることも分かってさらに楽しさが増えいき、結果的にその理論をベースにする言語習得研究で著名な先生のところで博士の勉強をすることができました。

現在、大学生の皆さんに、お薦めできる言語学関連の本の一つは、スティーブン・ピンカーの『思考する言語』です。言語学の考え方や議論の進め方を明快に示してくれており、専門的知識が無くても知的議論を楽しめるはずです。また、言語関連以外にも、哲学のスターターとしてマイケル・サンデルの『これからの「正義」の話をしよう』は面白く、思考訓練にもなると思います。また、西内啓『統計学が最強の学問である』は現代の調査・研究に欠かせない統計の基本的な考え方が分かります。さらに、表情などから嘘を見抜くPamela Meyer “Liespotting: proven techniques to detect deception”も一般書として興味深く読めるものだと思います。このように、各分野にはとても面白い本が数多くありますので大学生の間にいろいろと読んでみてください。ただし、一般書は、その分野の単なる入り口に過ぎません。また、学術論文のように審査があるわけではありませんので、時には誤りを含むものや全くその分野を誤解しているもの、そして考え方や理論が古くなっているものも存在します。しかし、そのような本を通して、ひとたびあなたがその分野の虜になり、さらにその先に進んで行けば、専門家でないと分からない未知の世界が広がり、その禁断の園に迷い込むことになるでしょう。



デザイン学部 デザイン学科 教授

の場 ひろし

Matoba Hiroshi

本文中に登場した図書

杉山恒太郎〔著〕
『**ジャパン・プレゼンテーション**
:世界に伝わる広告表現スキル』
[913.6/H 92]

星新一〔著〕
『**星新一ショートショート1001**』
[913.6/H 92]

ロバート・ブロック〔編〕、星新一〔訳〕
『**フレドリック・ブラウン傑作集**』
[933.5/B 77]

小津安二郎・人と仕事刊行会〔編集〕
『**小津安二郎:人と仕事**』
[778.21/O 99]

田中真澄〔編〕
『**小津安二郎戦後語録集成**
:昭和21(1946)年-昭和38(1963)年』
[778.21/O 99]

蓮実重彦、山根貞男〔編〕
『**成瀬巳喜男の世界へ**』
[778.21/N 54]

志賀直哉〔著〕
『**志賀直哉全集**』
[918.68/Sh 27-1]

瀧井孝作〔著〕
『**志賀さんの生活など:随筆集**』
[910.268/Sh 27]

尾崎一雄〔著〕
『**志賀直哉**』
[910.268/Sh 27]

網野菊〔著〕
『**雪晴れ:志賀直哉先生の思い出**』
[910.268/Sh 27]

阿川弘之〔著〕
『**阿川弘之全集**』
[918.68/A 19]

池部良〔著〕
『**21人の僕:映画の中の自画像**』
[778.21/I 31]

藤枝静男〔著〕
『**藤枝静男著作集**』
[918.68/F 56]

私の小説の読み方

私は昔から本を読むのが好きでしたが、小説だけはほとんど読みませんでした。特に長い小説は苦手です。著名な広告クリエイターの杉山恒太郎が、広告業界にも「小説が読めない、小説が苦手」と言う方が複数いらっしゃることを書いていますが、これを知って心強く思ったものです(ちなみに後述する志賀直哉も「長いもの(小説)はうけつけない」と語っています)。しかし、そんな私でも楽しんで読める小説をいくつか見つけていますので皆さんに紹介したいと思います。「小説が苦手」の同志のご参考になれば幸いです。

中学時代に、星新一やフレドリック・ブラウン、いわゆる「ショートショート」の作家を友人に勧められて読み始めました。明快な「落ち」が用意された短編のスタイルは当時の私にも面白く感じられました。回覧雑誌というほどでもないのですが、友人同士で真似事のショートショートを書いてみたりもしました。これはストーリー構築の一種の訓練になったかもしれませんが、学生時代の小説体験といえこの程度で、文学的なものにはほとんど興味を持ちませんでした。

その後、80年代頃からよく映画を見るようになり、日本映画の黄金時代と言われた50年代頃の作品に特に興味を感じました。「東京物語」等を監督した小津安二郎については、再評価の始まった80年代には何冊かの書籍が出版されていました。また、「浮雲」等を監督した成瀬巳喜男についても専門の雑誌に記事を見つけることができました。それらによると、二人とも、『暗夜行路』、『小僧の神様』等々有名小説家の志賀直哉を尊敬していて、彼の作品を映画化したいという気持ちを持っていたことがわかりました。それが興味の発端で志賀の全集を読み始めたのですが、短編が多く、簡潔な読みやすい文体で書かれていて、私でも無理なく読むことができました。家族とのやりとりや、身の回りの動物等を題材にした小説や随筆が特に味わい深く、題材のとりあげ方や描き方に面白さを感じました。

しかし、作品を読むだけでなく、彼と親しかった人々が志賀について書いた文章を読み始めることで、志賀の人物像の理解が深まり、志賀の世界が一層面白く感じられるようになりました。瀧井孝作、尾崎一雄、網野菊、阿川弘之は、志賀の薫陶を受け作家として成長した弟子にあたる人々で、志賀の生活ぶりや志賀が彼らに語った言葉についてたくさん文章を残しています。いわゆる作家論や作品論ではなく、優しいが、率直、潔癖で、時に短気で癪癪を起しやすい志賀の人柄がよくわかるエピソードが多く、志賀の作品から受ける印象を裏付けるような内容になっています。特に阿川は、老年期の志賀と最も近く関わりを持った人物ですが、私は一度だけ、志賀について彼と話をする機会を得ました。その時、「映画関係の人は、志賀のことを面白おかしく書く傾向がある」という主旨の注意を伺ったのですが、「それはどなたでしょうか」と問うことは控えたので、結局誰のことなのか正確には判りません。これは私の想像ですが、「青い山脈」等々有名映画俳優の池部良が書いたユーモアのある一連のエッセイのことを仰ったのかもしれません。文学青年でもあった池部は、多くの映画人や文学者について描写していますが、人物を少々滑稽に書く傾向があり、志賀についても同様です。多少の誇張が含まれているかもしれませんが、志賀を崇める文壇の人間にはなかなか書けない書き方で、新鮮な志賀の姿を伝えていると思います。

本大学の位置する浜松で眼科医を開設していた医師兼作家の藤枝静男も、志賀を慕い親しく交流した一人です。彼は、志賀が小津と、雑誌『白樺』の時代からの仲間の里見弴の三人で浜松を旅行した際のホストを務めた思い出を書き残しています。

これらの志賀周辺の人物の書いたものからは、志賀の日常だけでなく、彼らがいかに志賀を尊敬していたか、当時の志賀がいかに突出した存在であったか、ということが伝わってきます。志賀の作品は今読んでも十分面白いのですが、その文体や作風はその後の作家やジャーナリストに浸透しているため、当時彼らが作品から受けた衝撃を現在の我々が正確に共有することは難しいと感じます。そういった当時の感覚を想像する上でも、彼らの文章は参考になると思います。

志賀について書かれた本には古いものも多く、80年代頃既に入手し難くなっていたものもありました。私は神保町の古本屋街等で時間をかけて集めてきましたが、最近はamazon等を使ってネットで簡単に古本を手に入れることができるようになっています。私もネットで新たに入手したものもあって恩恵を受ける者ではあるのですが、これまでの労力を考えると少し複雑な気持ちになってしまいます。

文学に精通しているわけでもないのに、このような文を書いたのは、小説の楽しみ方にも色々あるということ、そして苦手と思える分野にも案外自分に合った接し方が見つかるものだ、ということをお伝えしたかったからです。ご参考になったでしょうか？

『愛する人達』

川端康成 [著]
新潮社, 2006.3
[913.6/Ka 91]



川端康成といえば、大正、昭和を代表する小説家で、日本人で最初にノーベル文学賞を受賞した人物です。彼の作品で筆頭に上がるのは『雪国』、『禽獣』、『山の音』、『千羽鶴』あたりでしょうが、私が今回推したいのは、『愛する人達』という作品です。本作品は、全9編から成る短編集です。そして、私がこの本を推す理由ですが、それは面白いという点からです。面白いというのは、曖昧な表現ですが、私にはそう表現する以外はできません。私の中ではその面白さを、ほかの言葉で代替することができません。

ここで、『愛する人達』の特徴をうまく表現していると思われる文章を解説から引用します。

『愛する人達』の諸短編は、評家にとって捕捉し難い小説というものの実例のごとき観を呈している。(中略)『愛する人達』という題名が示している如く、いずれも愛情を描いている点でその諸短編は一貫したものを持ちながら、しかも取材の上に想念の上に更に手法の上にも百花撩乱ともいふべき「変化」をみせている。作者の豊饒な才能が偲ばれる。そしてそれぞれ、どれを読んでも面白い。(川端康成『愛する人達』新潮社、1941年、190～191頁)

上記の引用によって、私の言いたいことはすべて言い尽くされてしまった感じはします。解説を書いた高見順さんの言う通り、この短編集に収められている小説は、評論しにくいという印象を私も持ちます。しかし、このことは内容が難解であるということを意味しません。むしろ、非常に簡潔で、わかりやすい。それでいて、変化に富み、面白いのです。

ここまで、内容に全く触れることはできませんでしたが、それぞれ約20ページ程度の小説ですので、まずはこの本を手にとってみてください。そうして、面白さに気づいてくれると、幸いです。そのような人が一人でもいてくれれば、この推薦文を描いた私にとってこれ程嬉しいことはありません。

【文化政策学部 国際文化学科 3年 戸蔵 匠】

皆さんは将来社会に出て働く、ということに不安を抱えていませんか。抱えている方も多いのではないかと思います。特に「ブラック企業」という言葉に恐怖を感じませんか。この物語は、まさにそのブラック企業で働いて、心身共に疲弊した男性のお話です。

ブラック企業にこき使われ、心身共に疲弊した主人公青山隆は、無意識に線路に飛び込もうとしてしまいます。そんなところを、元同級生と名乗る「ヤマモト」という男に助けられます。主人公は彼と話しているうちに心を開くようになります。更に、彼が心の安らぎになったのか、仕事も頑張れるようになっていきます。ですが、実は同級生ではなく赤の他人ということが分かります。気になって調べていたら、山本純という3年前に自殺した人のニュースを見つけてしまいました。

この本は、ブラック企業で働く主人公の行方も気になるところですが、ヤマモトの正体に関してミステリー要素もあるため、2度楽しめる作品だと思います。主人公はこのブラック企業に押しつぶされてはしまわないか、もしかしてヤマモトは幽霊なのではないか、の2点に、とてもハラハラさせられました。ただ、最後はとても綺麗に完結しており、すっきりとした気持ちになれます。

ただ、私がこの作品で一番主張したい良さは別にあります。それは、社会人になるにおいて、忘れてはいけない「大切なこと」を確認できることです。タイトルにもあるように、物語の中で主人公は今の仕事を辞めてしまうのですが、そのシーンが感動的で、ジーンとします。辞めるときの主人公のセリフや、辞める前にヤマモトが伝えたセリフを読んでいると、ハッとさせられます。「命の大切さ」や、自分にとっての「幸せ」とは何か、など当たり前なようで、案外忘れてしまっていることも多いです。そんな大切なことを、思い出すきっかけになるかもしれません。今後社会に出る学生さんや、仕事を始めて数年の社会人の皆さんに、是非読んでみて欲しいです。これから生きる勇気をもらえると嬉しいです。

【デザイン学部 デザイン学科 3年 中島 英理奈】

『ちょっと今から仕事やめてくる』

(メディアワークス文庫)
北川恵海 [著]
KADOKAWA アスキー・メディアワークス
2015.2
[913.6/Ki 63]



特集 わたしの1冊 ～おすすめの本を紹介します～

今、枕元には鹿島茂『神田神保町書肆街考』、真鍋昌賢『浪花節 流動する語り芸』、中野ジェームズ修一『カラダの反応が劇的に変わる！動的ストレッチ』、増野亜子『民族音楽学12の視点』、夏目漱石『明暗』、司馬遼太郎『坂の上の雲』が積んであるのですが、この中から『坂の上の雲』（一～八）にしましょうか。

私は今『坂の上の雲』を読んでいるところなのです。音楽研究者とはいえ、明治時代や戦争は私の研究領域なので、本当はとっくに読んでいなければとても恥ずかしい。でも、恥を忍んでこれを書いています。

そういえば司馬遼太郎は身近な存在でした。普通のサラリーマンだった父親が、司馬遼太郎のファンだったので、本棚にはすべての著作が並んでいたはず。そんな父親を、小学生の頃は読書家だと思っていましたが、高校生くらいになるとそれは高度経済成長期の典型的なサラリーマンの読書にすぎないことがわかり、大学生の頃には内心ちょっと小馬鹿にしたものでした。いわゆる「司馬史観」に対する侃々諤々・賛否両論ももちろん知っていましたが、だからこそ、なんとなく敬遠しているうちに、歳をとってしまいました。

しかし、定評のある名作は、読んでおいたほうがよいでしょう(とても重要)。最近になって、明治期の軍隊や日清・日露戦争をきちんと把握する必要性に迫られ、いろいろ参考書に目を通したものの要領を得ず、そういえばまだ『坂の上の雲』を読んでいなかったことに気がつき、谷島屋で文庫本を買って読み始めて、ただただ後悔。史実や史観はともかく、やはり、はなしの運びが断然うまく、面白い。一概には言えませんが、研究者の歴史叙述は、正確を期するあまり読みにくく、かえって理解を阻むという不幸に陥ることがよくあります(自戒を込めて)。

ところで、本作はNHKでドラマ化されたため(2009～11)、どうしても阿部寛・本木雅弘・香川照之のイメージで読み進めることになってしまいます(実は、私はまだ3巻の途中で、読了していません)。

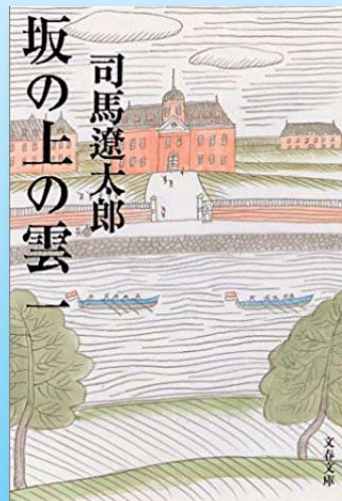
【文化政策学部 芸術文化学科 教授 奥中 康人】

『坂の上の雲』

司馬遼太郎 [著]

文藝春秋, 1999.1-1999.2

[913.6/Sh 15/1]



『暇と退屈の倫理学』

(増補新版)

國分功一郎 [著]

太田出版, 2015.3

[113/ Ko 45]



「暇と退屈の倫理学」。とても奇妙なタイトルだと思いませんか。「暇」と「退屈」はどう違うのか。「暇と退屈」に「倫理学」などあるのか。そもそも「倫理学」とは何か。そんな疑問が次々と生まれます。疑問が現れるのは良いことで、私たちの自明性に亀裂が入り、新しい視野が広がります。

私たちが「ああ暇だ」と言うのは、時間を持て余しているときです。つまり「何もすることがない時間」が「暇」なのです。こうした時間があると、私たちは「退屈」を感じる。「何もすることがなくて退屈だ」はわかりやすい。だが一方、「何かをしている時間」でも「退屈」を感じるときがあります。例えばつまらない映画を見ているとき。「暇」ではないが「退屈」です。だから「暇」と「退屈」は違う。この違いを出発点にして何が言えるのか。この先、本書は「ひなたぼっこするトカゲ」とか、「ハイデガー哲学」など様々なトピックから「暇と退屈」を考えることになります。実際に読んでみて楽しんでください。

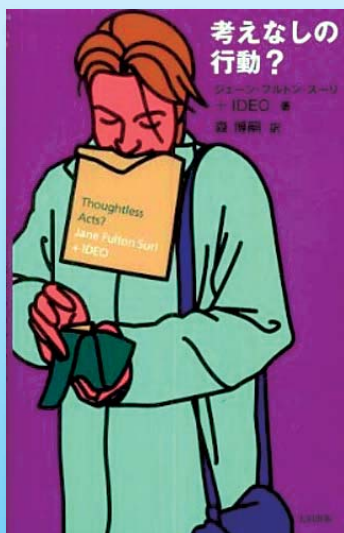
一つ見通しをつけておくとすれば、本書は文明論でもあることです。近代以降を生きる私たちはテクノロジーの進展により、太古の人間と比較し、はるかに多くの「暇」の時間を持つことになった。そこでは必然的に「退屈」が生まれ、人はその「退屈」を解消しようと躍起になる。ひょっとすると、現在の私たちの活動の多くが、この「退屈」から逃れるためのものではないのか。「退屈」から逃れるために私たちは、これまでにない消費社会を作り出してきただけではないか。こんなことを作者は問うています。

「暇と退屈なんかない、私は忙しい」。こう発言する人にも読んでほしい。この本は、そうした発言こそを問い直すものだからです。ただし、この本は最初から読みすすめないと、論理がわからなくなってしまう厄介さがあります。それこそ暇がないと読めません。だから学生時代にふさわしい本だと思います。みんなで輪読するという方法もあります。この作者が論じる「暇と退屈」をゆっくりと理解しながら、皆さんの生きていく時間を、どう使うべきかを考えてほしい。タイトルの倫理学がこれで実践されるのです。

【文化政策学部 文化政策学科 教授 加藤 裕治】

『考えなしの行動？』

ジェーン・フルトン・スーリ,
IDEO [著]; 森博嗣 [訳]
太田出版, 2009.7
[141.7/Su 76]



昨今、「デザイン思考(design thinking)」という言葉が良く聞かれるようになりました。ここでいうデザインは、格好いい形を目指すというような意味にとどまらず、モノ・コトについて調べ、課題を見だし、提案をまとめていくといった意味となります。デザイン思考は、デザイナーがデザインを実行していくための手法および考え方などをまとめた言葉です。その考え方はデザイン以外の業界においても参考になるということで、巷でも聞かれるようになってきました。

このデザイン思考という言葉が世に広めたのは、IDEOというデザインコンサルティング会社です。本書は、そのIDEOに所属しているジェーン・フルトン・スーリがまとめたヒューマン・ウォッチング(人間観察)の結果になります。この本が出版された2009年はまだデザイン思考がそれほど広まっていなかったこともあり、書中にデザイン思考という言葉は出てきませんが、そのプロセスにおける観察の重要性は変わりません。この本では特に深く考えずにとってしまう行動、そしてその結果として残されたものなどが写真と短い文章とで紹介されています。例えば、「ビザの皿」という項目ではビザを折り曲げた紙皿で持っている写真が載せられています。無意識に、持ちにくい食べ物を柔軟性のある紙皿で持つその風景は、手を汚したくないが上手に食べたいというニーズ、折れ曲がる素材の皿というポテンシャルを気づかせてくれるというわけです。

筆者のスーリはヒューマン・ファクターの専門家であり、私と専門が似ています。私も授業でヒューマン・ウォッチングを勧めています。それはデザイナーとして他者を良く知っておく必要があるという意図からです。この本では、無意識の行動に着目することで、人間全般の理解というより「ハッ」とさせられる細かな気づきが得られるでしょう。そして、気づきの切っ掛けを得ることで、さらに街中におけるヒューマン・ウォッチングが捗るはずで

【デザイン学部 デザイン学科 教授 迫 秀樹】

うさぎが旅をする話です。村を飛び出したうさぎの一群が数々の試練を乗り越えながらユートピアを求めて彷徨う話です。

一匹の若いうさぎが、予言者である弟の「村に危険が迫っている。」というメッセージを長に伝えるも相手にされず、少数の有志を従えて村を出るところから始まります。森を抜け川を渡り、人間はもちろん、猫や犬、鼠や鳥達といった様々な敵と遭遇しながら、知恵を出し合い協力し合って、最後は強大な軍隊を率いる將軍うさぎとの壮絶な戦いに挑みます。

こう書くと、よくある動物を主人公にした冒険物と思われがちですが、全くそうではありません。大げさに言えば、全編に児童文学とは思えない哲学的で詩的な雰囲気漂っています。各章の前に置かれる詩や戯曲からの引用や、途中挿入される伝説のうさぎの冒険譚がその要因の一つですが、何より予言者うさぎの存在が大きいです。とは言え、冒険ファンタジーとしてのハラハラドキドキの要素も満載で、何とも不思議な一冊です。

うさぎ達は擬人化されておらず、草を食べ、日向ぼっこをし、よく眠ります。あまりにもうさぎの生態や生活習慣がよく表現されているため、彼らが話すうさぎ語、例えば正午を指す「ニ・フリス」や、食事を指す「シルフレイ」さえ本当のように思えて来ます。

この本を買ったのは高校生の時でした。今にして思えば、なぜ手に取ったのか記憶がありませんが、おそらく書評が何かで見て気になったのでしょう。当時は正直言ってあまり面白くは思いませんでした、というか難解な印象が強かったのを覚えています。が、時と共に面白さや深さが解るようになって来ました。作者リチャード・アダムスにとって処女作ですが、原作は7つ(一説には13!)もの出版社に断られた後ようやく出版されると、イギリスの二大文学賞をダブル受賞しベストセラーとなりました。うさぎ好きの人にもそうでない人にもおススメしたい一冊です。

【デザイン学部 デザイン学科 教授 服部 守悦】

『ウォーターシップ・ダウンのうさぎたち』(上)(下)

リチャード・アダムス [著]; 神宮輝夫 [訳]
評論社, 1975
[933/A 16/1]



特集 わたしの1冊 ～おすすめの本を紹介します～

ハロウィンが終わり、街の装いはクリスマスへと変わってきました。恋人と、友人と、家族と、相手は違えど、予定を立てている人も多いのではないのでしょうか。正直とても羨ましい。なぜなら、私にはクリスマスよりも重要なイベント、修士論文の提出が控えているからです。現在、執筆を行っていますが、思うように文章が書けません。いざ書こうとすると、意味が曖昧だったり、用法を間違えて覚えていたりする言葉が多く、筆が進みません。恥ずかしいばかりです。

ところで皆さんは、分からない言葉に出会った時どうしていますか。多くの人が紙、電子の媒体は違えど、国語辞典を利用しているはず。皆さんも一度は手にしたことがあるものですが、使い方は調べるだけではないのです。今回ご紹介する本は、国語辞典の楽しみ方や選び方、辞書の歴史などが熱く語られ、授業では触れなかった国語辞典の魅力を伝えています。

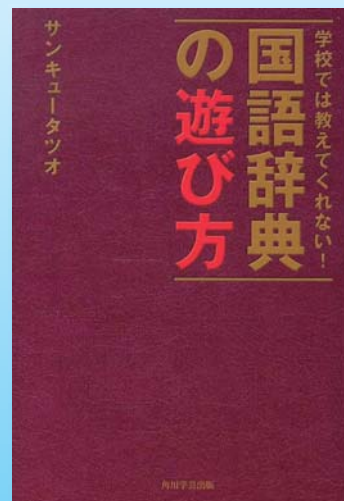
同じ内容の国語辞典はなく、出版社、編者、辞書の用途や大きさの違いによって1冊1冊の特徴が決まります。筆者は国語辞典をカバンやキャラクターに喻え、各辞書の個性を分かりやすく解説します。皆さんに試してもらいたいのは、自分に合う辞書が分かる「おススメ辞書占い」です。字面だけで惹かれてしまいますよね。そして、何より溢れんばかりの辞書愛を感じました。辞書を徹底的に調べ、分析し、自分の言葉で語る、この原動力が辞書への愛情と知的好奇心だから頭が下がります。これは研究に通ずる部分だと、個人的には思っています。

著者は日本初の大学院博士課程芸人で、大学の非常勤講師としても活躍しています。紹介した本は、芸人らしいクスッと笑える表現が散りばめられ、読んでいて飽きません。他にも、一風変わった学術論文を集めた『ヘンな論文』を書いています。卒業研究、学期末のテストやレポートに追われている皆さん、勉強で疲れた時などに読んでリフレッシュしてください。

【大学院 文化政策研究科 2年 大上 美来】

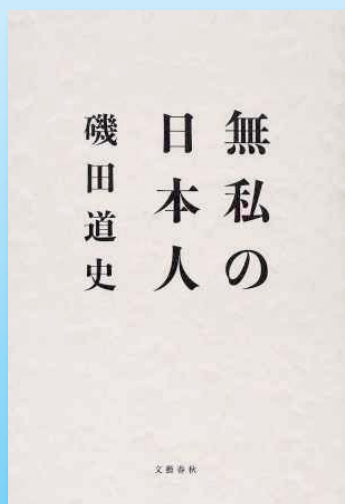
『学校では教えてくれない！ 国語辞典の遊び方』

サンキュータツオ [著]
KADOKAWA, 2013.3
[813.1/Sa 65]



『無私の日本人』

磯田道史 [著]
文藝春秋, 2012.10
[281.04/I 85]



「わたしの1冊」のお話を頂いた時、すぐに思い浮かんだ本は、昨年まで本学に在籍されていた磯田道史先生の著書『無私の日本人』です。この本では、江戸時代中期に生きた3名の生涯について記されていますが、この中から穀田屋十三郎という人物について紹介します。

仙台藩にある吉岡宿はとても貧しく、夜逃げをする人が後を絶たない宿場でした。そこで酒屋を営む商人の穀田屋十三郎が、亡き父浅野屋基内の言葉「宿中がたちゆくようにせねばならぬ」の意味を理解して一念発起し、茶屋を営む知患者の菅原屋篤平治に内密で相談したことから始まります。篤平治は「仙台藩にお金を貸し、その利息で宿場を救う」という前代見聞の提案をします。当時の武士社会では、一町人が上に対し物申すことは、命と引き換えの覚悟が必要です。貸すお金の工面をするため一人二人と話しかけ、有志は9名になりました。ところが、仙台藩は「金千両を用立てれば応ずる」と途方もない金額を提示し、まともにとりあおうとはしなかったのです。

ここで役人の心を動かしたのは、亡き父の熱意でした。「浅野屋基内というものが生涯をかけて小銭を貯め、臨終の床で『その銭をお上に差し上げ、吉岡宿を救え』といって死んだ。これが感銘を呼び9名まで私費を投じるものが出た。浅野屋では店が傾く覚悟を幼い孫までして献金した」のです。十三郎が一念発起してから約7年余を経て、ついに仙台藩に千両を貸すことが実現しました。

私が胸を打たれたのは、一家が路頭に迷う程の金額を、何の迷いもなく「先祖から言い伝えられたことを実行出来る時がきた」と安心して差し出すところです。本のタイトルの「無私」とは、こういう人のことをいうのだと思いました。あとがきに記された「ほんとうに大きな人間というのは、世間的に偉くならずとも金を儲けずとも、ほんの少しでもいい、濁ったものを清らかなほうにかえる浄化の力を宿せた人である」の一文から、磯田先生がこの本に込めた想いが伝わってきます。

生きていくうえで、大きな岐路に立った時、気持ちが崩れそうになった時に、先人の生きざまから、自分が大切にすることは何かを考えさせてくれる一冊です。

【保健室 保健専門員 沖田 千枝子】

ユニバーサルデザイン絵本コンクール2017を開催しました

静岡文化芸術大学では、身体的・知的特性、年齢、文化などを越えて、皆が一緒に楽しむことのできるユニバーサルデザインの考え方を採り入れた絵本を募集し、「ユニバーサルデザイン絵本コンクール2017」を開催しました。受賞作品は以下のとおりです。多数のご応募ありがとうございました。

- 大賞「おしゃれだ〜いすき」 杉保紅名（浜松市立内野小学校3年）
- 学生大賞「宇宙と深海図鑑」 八木茂代、山下晶
- ユニバーサルデザイン研究賞
「コロコロコロ」 鈴木明日香（静岡県立清水南高等学校2年）
- 審査委員長特別賞
「できるかな」 福田美羽（宮崎市立生目台中学校3年）

《子ども部門》

- 優秀賞
「おかしのいえ」 葛西いち莉（天王幼稚園 年長）
「ほのぼのくまの魚つり」 佐藤美月（浜松市立神久呂小学校3年）
「こねことすず」 鈴木綾乃（浜松市立湖東中学校2年）
- 佳作
「金魚すくい」 藤木桜和（磐田市立福田小学校5年）
「夏休み」 本田紗亜奈（不知火小学校 3年）
「うさぎのりょうこう」 吉田希（磐田市立長野小学校 2年）
「だれのおうちかな?」 大井愛菜美

《高校生部門》

- 優秀賞（該当作品なし）
- 佳作（該当作品なし）

《一般部門》

- 優秀賞
「らっかせいとナッツのなかま」 寺田祐子
- 佳作
「ぼくにはぼくのなまえがある」 いぶき
「さわって遊べる おもちゃのチャチャチャ」
星奈央（静岡福祉大学健康福祉学科4年）

※受賞者の敬称は省略させていただきました。
※受賞者の所属は、応募票に記載されていたものです。

表彰式



展示会



「おしゃれだ〜いすき」（大賞）



「宇宙と深海図鑑」（学生大賞）



「コロコロコロ」（ユニバーサルデザイン研究賞）



「できるかな」（審査委員長特別賞）

